

児童自らが学習改善に向かう姿を目指した 小学校外国語科の授業実践 —自己調整学習理論に着目して—

宗田晶子 (MUNETAKIKO)

鳴門教育大学大学院

要約

グローバル化や情報化が進展する変化の激しい社会を生き抜くために、社会の変化に主体的に向き合って関わり合える、自律的な学習者の育成が必要とされている。そこで、本研究では、自己調整学習理論の3段階「予見」「遂行」「内省」と3要素「メタ認知」「動機づけ」「学習方略」を取り入れ、自ら学習改善ができる児童の姿を目指し、実践を行った。本稿は、その実践内容及び結果をまとめたものである。

(キーワード：小学校外国語, 自己調整, メタ認知)

1. はじめに

1.1 研究の背景

グローバル化や情報化が進展する変化の激しい社会の中では、先を見通すことがますます難しくなっている。平成29(2017)年に文部科学省から出された答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」には、「これからの子どもたちにとって、予測できない未来に対応するためには、社会の変化に受け身で対処するのではなく、主体的に向き合って関わり合い、その過程を通して一人一人が自らの可能性を最大限に発揮し、よりよい社会と幸福な人生を自ら創り出していくことが重要である」と示されている。

このような社会の変化を受け、学習指導要領では、子どもたちに必要な力が「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱に沿って具体的に示された。この中でも「学びに向かう力、人間性等」は、「他の二つの柱をどのような方向性で働かせていくかを決定付ける重要な要素」とあり、具体的には「主体的に学習に取り組む態度」の観点において、自らの学習状況を把握し、学習を調整しながら学ぼうとしているかを見取っていくとしている。自らの学習の調整に関しては、「メタ認知能力」を働かせることが必要であるとされるが、人は初めから高いメタ認知能力を持って生まれるわけではなく、発達の中で徐々に育まれるものであるという(Flavell, 1976)。

以上を考慮すると、今、学校教育において、児童にメタ認知能力を育み、自らの学習を

改善していくことができる自律的な態度を育成することが重要であることが分かる。小学校外国語科の授業の中で、それらを具現化するにはどのような手立てが必要か、指導の在り方について探っていく。

1. 2 研究の目的

自己調整学習理論に着目し、自ら学習改善に向かう児童の育成を目指した授業実践の在り方について研究することを目的とする。

2. 先行研究

2. 1 自律的な学習者と自己調整学習理論

Holec (1981) によると、自律的な学習者とは、「自分にどのような学習が必要であるかを見極め、学習のゴールを決め、その学習に必要な教材を選択し、自分の不得意な部分を認識し、適切な学習のペースや時間配分を決め、学習をモニターしたり、学習を評価したりすることができる学習者」である。植阪 (2012) も、自律的な学習者とは「つまずいた時に自分で課題を発見し、克服できる人」とし、未知の知識・技能に出合った時にも、自分で学び続ける姿勢を育てることが「生きる力」になると述べている。こうした考え方は、Zimmerman (1989) や Zimmerman & Schunk (2001) が自己調整学習研究の文脈において論じる自己調整的な学習者のイメージと軌を一にするものである。

自己調整とは、「学習者が学習過程に、『メタ認知』『動機づけ』『学習方略』において、自分自身の学習過程に能動的に関与していること」(Zimmerman, 1989) であり、このように進められる学習が自己調整学習である。

Schunk & Zimmerman (1998) は、自己調整学習の過程を「予見」「遂行」「内省」の3段階の循環プロセスに示した。自己調整学習では、この「予見」「遂行」「内省」の3段階に「メタ認知」「動機づけ」「学習方略」を働かせていく。(図1) このサイクルの質を高めていくことにより、自らの学習を調整できる自律的で深い学習ができるようになっていく。

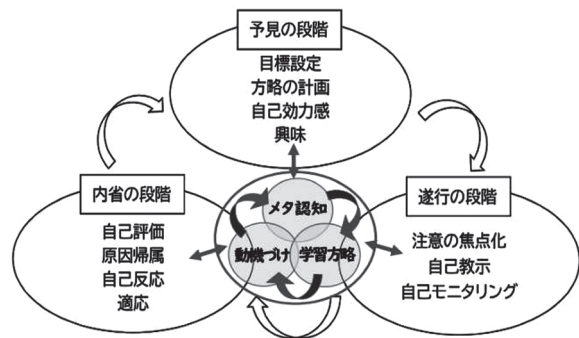


図1 「自己調整学習における3段階の過程」
伊藤 (2012) が作成した物を参考に筆者が作成

2. 2 自己調整を促す評価

高木 (2019) は、これからの時代に求められる評価について、子どものそれぞれのよさを「値踏み」し「序列」を付けるのではなく、子ども自身が気付いていないよさに気付かせ、さらにそれまでにはもっていなかった資質・能力を獲得することができるよう、指導者が支援する Assessment としての評価が重要であることを指摘している。直山 (2021) も「指導と評価の一体化」の必要性について述べ、これにおける評価の本来の意味は形成的評価のことであると述べている。梶田 (2007) は、形成的評価を「中間段階での評価であり、評価情報をフィードバックして活動過程の改善・改革に生かすという評価のあり方」と説明して

いる。授業の過程で行われる形成的評価は、授業中の学習者の様子から得られた情報により、即時的なフィードバックが可能であり、さらに授業時間内に授業者の指導改善へ結びつくことが考えられる。

以上のように、形成的評価は児童の自己調整を促す上で、重要な役割を果たす。授業実践において形成的評価を行い、個々に応じた支援を行うよう努めることとする。

2. 3 自己調整を促す振り返り

廣森（2006）が「自律した学習者へと成長するために必要不可欠な要素として位置づけられるのが、学習者のメタ認知である」と述べているように、児童の自己調整が促されるには、メタ認知が重要な役割を担っている。メタ認知を促すには、授業終末で行われる「振り返り」で内省を行うことが大切である。佐藤（2023）は、児童が書いた振り返りシートの記述内容から児童の変容が見られることを指摘した。幡井（2020）は、「課題に対して自分がどの段階にいるのか、子ども自らが自分の力を正しく診断できるような文言の設定をしたり、振り返りカード記入の際には、振り返りの視点について丁寧に声かけをしたりすることを心がけている」と述べている。振り返りシートを活用することで、児童が自己調整を行う様子や、次時に向けた課題の認識など、主体的に取り組む態度の参考になる記述を多く得ることができる。そして、指導者はそれをもとに次時の指導に活かすことができる。

2. 4 自己調整力の育成を目指した先行事例

自己調整力を育てるための外国語科の授業実践を概観すると、多くの実践において、言語活動の中で自己調整力を促している。言語活動を中心に行われる実践事例では、活動の途中で振り返りをする時間が設けられていることが多い。それは、「中間指導」や「中間評価」などの表現で呼ばれ、直山（2020）は「内容面」と「言語面」、そして「文構造」にフォーカスし、内容の深まりが見える指導が大切だと述べている。

中間指導の際には、教師や友達、時には教材との関わりによって自己調整が促され、佐藤（2023）は、「情報提供」や「環境・場の設定」が自己調整を助けることになると指摘している。情報提供には、例えば「指導者や友達のモデルの提示」が挙げられ、一人一台端末で、ALTのお手本やデジタル教科書の動画を見返すことも可能である。また、場の設定について、必要に応じて児童が活用できるよう辞書を置いたり、教室掲示に既習表現を掲示したりすることで、児童が必要に応じて確認し、学習を調整する手立てにする実践例もある。

以上のように、言語活動における中間指導が、児童の自己調整を促す重要な役割を果たすことが報告されている。児童や学習活動に応じて、有効だと思われる手立てを講じ、自己調整ができる児童の育成を目指し、研究を進めていくこととする。

3. 実践研究の計画と実際

3. 1 実践研究の計画

3. 1. 1 研究仮説

先行研究の概観を踏まえて、次のような仮説のもと授業実践を行い、その効果を検証

する。

仮説 自己調整学習理論に基づいた授業実践を行えば、自ら学習改善に向かう児童を育成することができる。

3. 1. 2 実践における手立てと検証方法

図2のように、「児童のやり取りや発表を中心とした言語活動」を中心に授業を行い、児童自身が学習状況をメタ認知できるよう、中間指導を行った。また、1時間の授業の中で自己調整学習理論の3段階「予見」「遂行」「内省」が行われるようにした。特に、遂行段階は、【Let's Talk1】→【Level up Time】（中間指導）→【Let's Talk2】の流れで行い、授業全体を通して、「予見」「遂行」「内省」段階に自己調整学習理論の3要素「メタ認知」「動機づけ」「学習方略」が働くよう、手立てを考えた。検証については、行動観察、パフォーマンス動画、成果物、Reflection sheet、意識調査などの結果をもとに行った。

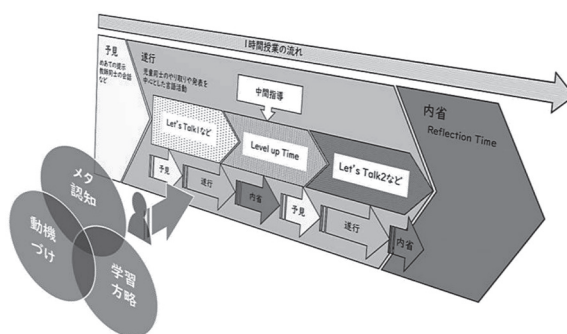


図2 1時間授業の流れと自己調整学習理論の関係

3. 1. 3 実践研究の計画

置籍校の第5学年26名を対象に実践を行った。計画は次の通りである。

時期	内容	
3月	・意識調査Ⅰ（事前）の実施	実態把握
4月	・パフォーマンステストⅠ（事前）の実施	計画
5月～7月	・授業実践Ⅰの実施 ・授業実践Ⅱの実施 ・意識調査Ⅱ（事後）の実施	実践・評価 実践・評価
9月	・Small Talk 重点授業実践の実施 ・パフォーマンステストⅡ（事後）の実施	実践・評価 検証

3. 2 授業実践Ⅰの実際

『Junior Sunshine5』（開隆堂）の「Lesson3 What do you have on Mondays?」の単元において、自分の夢をかなえるための時間割作りを単元ゴールにし、全9時間で行った。

第1時、第7時について、自己調整学習理論の3段階や3要素に基づいた手立てと児童の様子を示す。特に遂行段階の「児童同士のやり取りや発表を中心とした言語活動」に焦点を当て、手立てについては、児童の学習改善を促す【Level up Time】（中間指導）を抽出して示す。

《第1時》

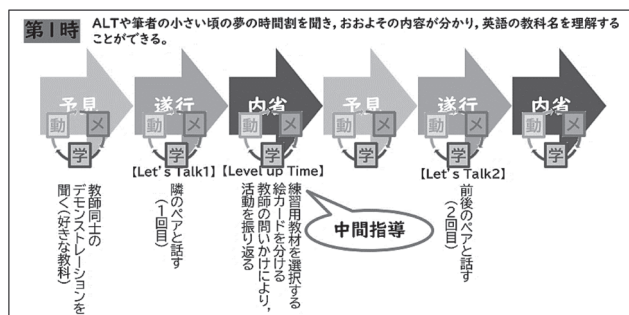


図3 Lesson3-① 言語活動の流れ（遂行段階）

児童の困り感を尋ねることで、メタ認知を促し練習したい思いを引き出すことができた。自分に合った方法（先生、友達、デジタル教科書、自作のパワーポイント教材）を選択して、自分のペースで練習することで、意欲を持って学習ができた児童が多かった。【Let's Talk2】後、「自分でも驚くほど成長したと感じる」というような感想を数多く聞くことができた。また、Reflection sheetには、「次はもっと言えるようになりたい」という学習意欲の高まりを感じる記述があった。

【Level up Time】（中間指導）の手立ての具体

- 【動】「困ったことはないか」と問い、困り感を引き出して、英語を正しく用いて話そうという気持ちにさせた。
- 【学】【Let's Talk2】後も再度絵カードを分け、言えるようになった数が増えたか尋ね、もっと言える表現を増やしたいという気持ちを引き出した。
- 【×】絵カードを使用し、言えることと言えないことを自覚させた。
- 【学】児童から練習したいという思いを引き出し、どんな方法で練習したいかを考えさせた。課題解決に向かうために必要な教材を整備し提示した。デジタル教科書やパワーポイント教材(図5)を紹介し、自分に合った練習方法を選択してレベルアップを目指せるようにした。

図4 Lesson3-① 中間指導の手立ての具体

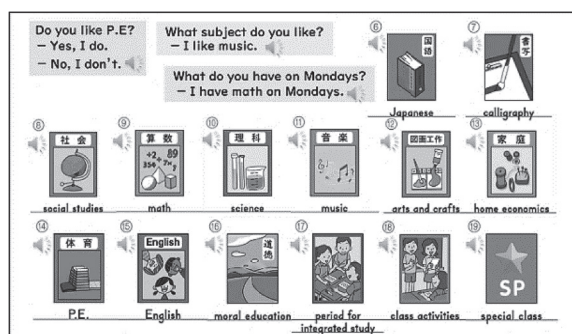


図5 筆者が作成したパワーポイント教材（教科名）

《第7時》

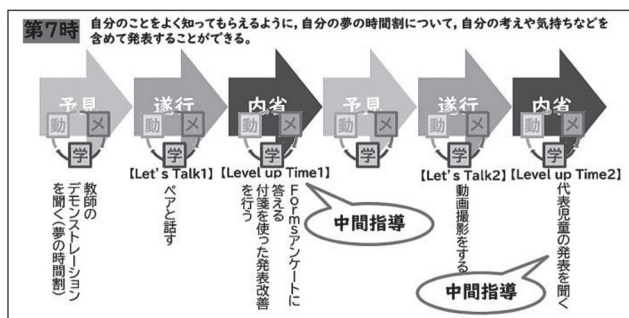


図6 Lesson3-⑦ 言語活動の流れ（遂行段階）

内省段階となる【Level up Time1】（中間指導）では、児童が取り入れた表現について I like~ はピンク色、I have~ は水色、I want~ は黄緑色、その他の表現は黄色の付箋を用意し、図8のように改善した。自分からALTに相談に行ったり、自分で発表の練習に適したスライドを見つけ、参考にして練習したりする自律的な学習の姿が

【Level up Time】（中間指導）の手立ての具体

- 【動】【Level up Time1】では、付箋を使って明確に改善点が示せるようにし、「自分にもできそう」という気持ちを持つようにした。Formsアンケートで改善できたことを振り返ることで、自分の成長を感じられるようにした。【Level up Time2】では、代表児童の発表を見ることで、自分の発表をさらに工夫したい気持ちを持たせられるようにした。
- 【×】【Level up Time1】では、付箋を使って発表の変化に気付くようにした。Formsアンケートでは、新しく付け足した表現にチェックを入れ、発表の変化に気付かせた。【Level up Time2】では、代表児童の発表のよかった点を共有し、自分の発表との違いに気付かせた。
- 【学】【Level up Time1】では、工夫した軌跡が分かるように付箋を使った。Formsアンケートでは、自分の工夫をモニタリングし、自己評価できるようにした。【Level up Time2】では、代表児童の発表のよい点を共有し、自分の発表に良さを取り入れられるようにした。

図7 Lesson3-⑦ 中間指導の手立ての具体

見られた。発表をよりよいものにしようと、限られた時間の中で一生懸命に思考していた。

ペアでの発表後には、自分がどのように発表を変えたのかを Forms のアンケート機能を使って自己評価させ、電子黒板のモニターに結果を映し出し、共有した。(図9) 1名の児童が「まだ何も変えられていない」と回答しているが、個別の回答結果を見ると、その児童は、「I want の表現を使って『ほしいもの』を入れた」にもチェックを入れていたため、児童によって工夫の程度には違いがあるが、全員が筆者のモデルを見て、思考力を働かせ、自己調整することができたということが分かる。このことにより、予見段階の手立てとして、教師のモデルを示すことが、児童の自己調整を促すために有効だったことが分かった。この画面を全体で共有し、相手によく伝わる工夫ができたことを称賛したところ、児童はとても自信がついたような表情が見られた。その後、筆者が選んだ代表児童2名の発表を聞いた。自分の欲しい物について話す内容に工夫を加え、ジェスチャーを交えながら話した児童の様子を見て、自然と拍手が起こった。【Level up Time2】(中間指導)で筆者が意図的に選んだ代表児童2人の発表を聞くことも、児童の自己調整を促すために効果的であった。



図8 児童が改善した時間割

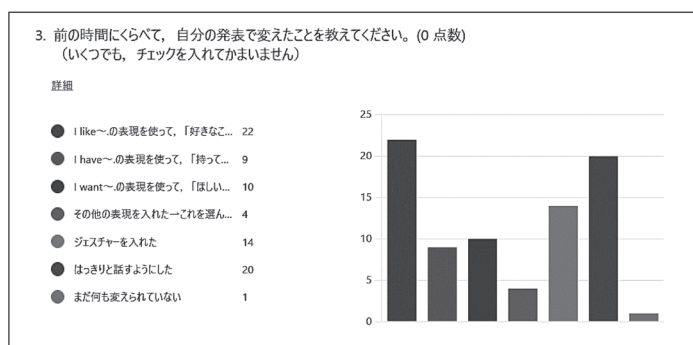


図9 Lesson3-⑦ 発表の仕方の工夫 (Forms)

3.3 授業実践Ⅱの実際

『Junior Sunshine5』(開隆堂)の「Lesson4 Can you do this?」の単元において、ALTや友達に自己紹介することを単元ゴールにし、全6時間で行った。第3時、第6時について、授業実践Ⅰと同様に、言語活動における手立てや児童の様子について示す。

《第3時》

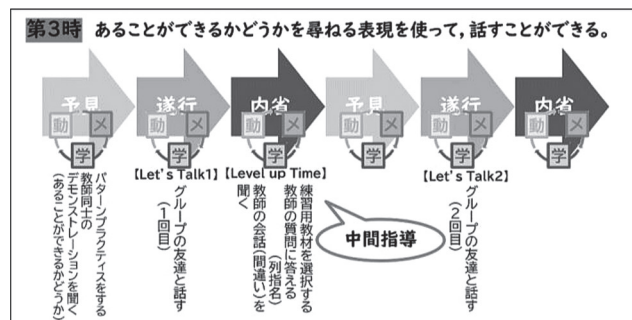


図10 Lesson4-③ 言語活動の流れ (遂行段階)

【Level up Time】(中間指導)の手立ての具体

- 動 英語を正しく用いて、よりよいやり取りにしようという気持ちを高めた。
- × 英語が正しく話せていたかどうかという視点で振り返ることができるようにした。
- 学 タブレットの中に、授業内容に沿ったパワーポイント教材(図12)を準備し、自分に合った練習方法を選択し、レベルアップを目指せるようにした。

図11 Lesson4-③ 中間指導の手立ての具体

1 回目の言語活動【Let's Talk1】の後、【Level up Time】（中間指導）で困り感を尋ねたが、「困っている」という反応が少なかった。ただ、机間指導の中で、Can you ~? を Do you ~? と間違っている児童を数名見つけていたため、故意に間違えたやり取りを示し、正しいかどうか尋ねてメタ認知を促した。これにより、【Let's Talk2】では Do you ~? という声が聞こえなくなった。全体指導の後には、個人練習の時間も取ったが、一人で練習が難しい児童については、筆者のところに呼び、一緒に練習をした。メタ認知が困難な児童については、教師の支援が必要であった。一方、メタ認知ができる児童は、声をかけなくても自主的に必要なファイルを開けて自己調整することができるようになってきた。2 回目の言語活動【Let's Talk2】では、【Let's Talk1】で聞くことができなかったグループの友達と活動を行ったが、意欲的にインタビューし、全員に質問をし終えたグループも出てきた。そこで、担任の先生や授業参観に来てくださった先生方にも質問してよいことを伝えると、意欲的に質問をしに行く様子が見られた。



図 12 授業内容に沿ったパワーポイント教材

《第 6 時》

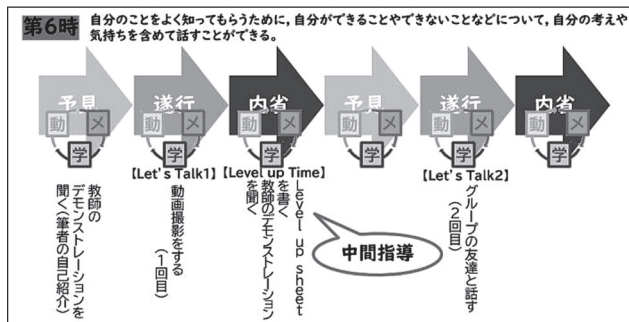


図 13 Lesson4-⑥ 言語活動の流れ(遂行段階)

【Level up Time】(中間指導)の手立ての具体

動 教師のデモンストレーションを示すことで、「自分にもできそう」という気持ちを持てるようにした。Level up sheet で、改善の仕方を分かりやすく示したことで、思考することへのハードルを下げた。

学 教師のデモンストレーションを示すことで、自分の発表との違いに気付かせた。Level up sheet で、改善がどのように進んでいるかをモニタリングできるようにした。

図 14 Lesson4-⑥ 中間指導の手立ての具体

【Level up Time】(中間指導)に、筆者の自己紹介を行った。児童は、「質問も入れて、相手の反応を見ながら発表の方が楽しい感じがして、発表を盛り上げていっている感じがする」「相手が聞いているかどうか確認できる」などと感想を述べていた。

ジェスチャーすることが効果的なことや I like ~, I want ~. などの情報を加えると、自分のことがより相手に伝わることに気付いていた。Level up sheet (図 15) を活用し、【Let's Talk1】で行った発表メモに、日本語で新たな情報を付けくわえたり、矢印を書いて順番を入れ替えたりした。【Let's Talk2】で行った発表会の動画撮影(2回目)を確認したところ、ほとんどの児童が時間内に改善できていたので、このシートが児

図 15 児童が書いた Level up sheet

童の思考を助ける手立てとなり、自己調整を促すための手立てとして効果的であったことが伺えた。代表児童の発表には、聞き手を意識して質問をし、相手の反応を確かめながら進めるといった発表もあり、児童が英語でのやり取りの楽しさを感じてきている様子が伺え、成長を感じた。

3. 4 Small Talk 重点授業実践の実際

既習表現に加え、リアクションなどを取り入れて、会話を続けることに慣れさせたいと考え、Small Talk 重点授業実践を行った。【Level up Time】には、困り感を共有し、言いたくても言えなかった表現について全体で考えたり、【Let's Talk1】中に見つけたよいモデルを全体で共有したりした。また、Small Talk Reflection sheet ① (図 16) により、自分の成長が確認できるようになり、学習のモニタリングとコントロールを繰り返すことで、次時への学習の動機づけとなっていると感じた。

図 16 Small Talk Reflection sheet ①

4. 授業実践の結果と考察

4. 1 意識調査から見える児童の変容

動機づけに関する質問項目では、どの質問についても肯定的回答をした児童の割合が高くなり、言語活動に楽しさを感じている児童の割合も高くなった。(図 17)

また、メタ認知に関する質問項目でも肯定的回答をした児童の割合が高くなり、特に、「1時間の学習を振り返って『次はこんなことを頑張ろう』と次の時間の目標を持っている」の質問について、「①そう思う」と回答した児童の割合は42.4%上昇した。(図 18) 授業の導入部で、めあてを予見させていたことや、中間指導の導入、授業終了前に書いていたReflection sheet の活用が有効であったことが分かる。

さらに、学習方略に関する質問項目の回答結果からは、言えるように何回も練習したり

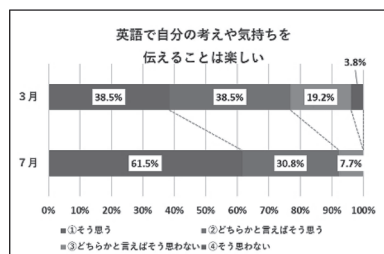


図 17 「英語で自分の考えや気持ちを伝えることは楽しい」(動機づけ) についての児童の回答

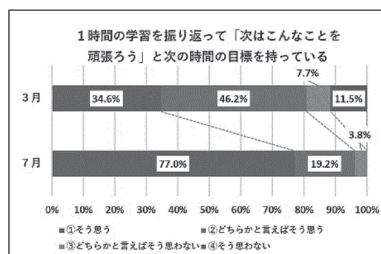


図 18 「1時間の学習を振り返って『次はこんなことを頑張ろう』と次の時間の目標を持っている」(メタ認知) についての児童の回答

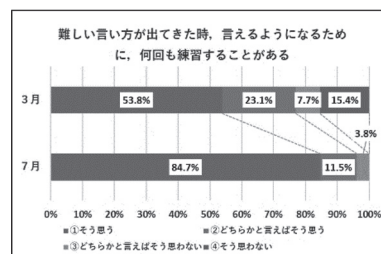


図 19 「難しい言い方が出てきた時、言えるようになるために、何回も練習することがある」(学習方略) についての児童の回答

秒間で17文話すことができ、自分の成長を実感していた。テストIで評価の3観点がすべてAだった児童については、発話数が約2倍に増えた。また、テストII後のアンケートでは、92.3%の児童が自分の成長を感じていた。(図23)

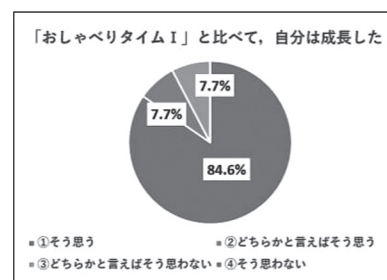


図23 「『おしゃべりタイムI』と比べて、自分は成長した」についての児童の回答

5. 実践研究の成果と課題

成果として、児童のメタ認知能力や自ら学習を改善しようとする自律的な態度が育ってきたことや学習動機の高まりとともに、英語でのコミュニケーションを主体的に楽しもうとする態度が育ってきたことが挙げられる。加えて、自律的な学習者の育成を目指した結果、学習指導要領で求められている資質・能力の育成に繋げることもできた。

課題として、まず本研究を一般化するにあたっては、被験者数の限界に留意しなければならない。また、個に応じた課題設定や自己効力感を高める手立ての導入をし、効果的な中間指導の在り方や効果的で効率的なフィードバックの方法の研究をする必要がある。

引用文献

- Flavell, J.H. (1976). Metacognition aspects of problem solving. In L. Resnick (Ed.) *The nature of intelligence* (pp.231-235). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- 幡井理恵 (2020). 「聞くことを可視化する授業づくりと評価」池田勝久(編)『小学校英語「5領域」評価事例集』(p.50 - 54), 教育開発研究所.
- 廣森友人 (2006). 「学習ストラテジーについて知っておきたいこと」大学英語教育学会 学習ストラテジー研究会(編著)『英語教師のための「学習ストラテジー」ハンドブック』(p.6 - 13), 大修館書店.
- Holec, H. (1981). *Autonomy and Foreign Language Learning*. Oxford/New York: Pergamon Press. (First Published 1979, Council on Europe).
- 伊藤崇達 (2012). 「自己調整学習方略とメタ認知」自己調整学習研究会(編)『自己調整学習—理論と実践の新たな展開へ—』(p.31 - 53), 北大路書店.
- 梶田叡一 (2007). 『教育評価入門』有斐閣双書.
- 文部科学省 (2016). 「幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)(中教審第197号)」
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf (アクセス日: 2022. 6. 11)
- 直山木綿子 (2020). 「令和2年度 全国小学校英語教育実践研究会『わたしの英語教育実践』」指導助言 .<https://www.zensyoei.jp/kiroku/3-2.pdf> (アクセス日: 2023. 12. 26)

- 直山木綿子 (2021). 『小学校外国語教育の指導と評価』 文溪堂.
- 佐藤美智子 (2023). 「第 18 回全国小学校英語教育実践研究会高知大会分科会資料」.
- Schunk, D.H. & Zimmerman, B.J. (1998). *Self-regulated learning: From teaching to self-reflective practice*. New York: The Guilford Press.
- 高木展郎 (2019). 『評価が変わる, 授業を変える 資質と能力を育てるカリキュラム・マネジメントとアセスメントとしての評価』 三省堂.
- 植阪友理 (2012). 「【対談】 自律した学習者を育てるために生徒の学習観を変える」 『VIEW21 中学版 2012 年度 Vol.3「自律的な学習者」を育てる学び方指導』 ベネッセ教育研究開発センター. (アクセス日: 2023. 6. 11)
https://berd.benesse.jp/up_images/magazine/02toku_034.pdf
- Zimmerman, B.J. (1989). A social cognitive view of self-regulated academic learning. *Journal of Educational Psychology*, 81, pp.329-339.
- Zimmerman, B.J. & Schunk, D.H.(Eds.)(2001). *Self-regulated learning and academic achievement: Theoretical perspectives* (2nd ed.). Lawrence Erlbaum Associates.